

あとがき

今回の展覧会はヤン・フォスJan Voss(1936～)の新作油彩・コラージュ展で、1991～92の作品をご覧いただくものである。前回のヤン・フォス展Jan Voss: Works 1986～7は1989年10月に開催している。したがって当画廊での2年半振り、通算5回目のフォス展となる。

カタログのテキストはイヴ・ミショー氏Yves Michaudのヤン・フォス論を掲載することとした。このテキストは昨秋、パリのルロング画廊で開催されたヤン・フォス展(セラミックの彫刻作品を展示)のカタログのためにミショー氏が寄稿されたものである。このヤン・フォス論は、フォスのしごとを長年にわたり観てこられたミショー氏の論稿で、セラミックの彫刻作品にとどまることなく、フォスのしごとの全貌をとらえたすぐれたものである。そこで、ミショー氏ほかルロング氏、フォス等関係者のご了承を得て、このカタログに転載することとしたものである。また、唐牛幸子、熊倉純子のお二人に翻訳の労をとっていただいた。関係者の皆様のご協力に厚くお礼申しあげる。

当画廊は昨年10月初め、パリのアート・フェアFIACに参加し、戸谷成雄の作品を展示した。そのFIACの最中、会場を一寸抜け出し、郊外のフォスのアトリエを訪問した。久しぶりで逢うフォスは元気で私はうれしかった。そこで最新作を前にフォスと話し合い、今回の展覧会の出品作を決めたのである。フォスは明るいしっとりとした色彩をうまく使うカラリストである、と私は思っているが、最近に加えて、黒の色彩そして白の色彩が目立つようになった。この黒と白の使い方が大変うまいのだ。このキラキラ輝く美しい色面が私は好きだ。またフォスは最近、大型(120×160cm)の多色木版制作に熱中し、これがなかなか美しい。大き過ぎて、わが国の個人の居住空間にはいささか置くのが困難だが、しかるべき広い空間にはうってつけだど思う。ちからを感ずる。これも併せてご覧いただきたいものである。

この展覧会のためにフォス夫妻の来日を期待していたが、残念ながら今回は無理のようである。次回に期待したい。もっとも6月にはパリでお逢いすることになるでしょう。ご夫妻のご健勝を心からお祈りいたします。

1992年3月